

沈黙という問題

“The Half-brothers” 再考

金丸千雪

1. はじめに

短編小説“*The Half-brothers*” (1858) は、一人称の語り手による回想形式の物語である。それは過去形であり、語り手の「私」はその物語全体をすでには把握している。この時点において、「私」を常に愛して信じてくれた家族、すなわち、最も身近かな存在で私にとってリアリティーそのものであった父母と異父兄弟は、もはや、この世にはいない。母親ヘレンは、幸薄き宿命の下に再婚して、「私」を出産した直後に死んでしまう。ヘレンの連れ子で、「私」とは血のつながりのない兄のグレゴリーは、吹雪の高原で遭難した弟の「私」を救助するために、自らの命を落とす。そして、ヘレンの連れ子であるグレゴリーを敵視し、冷遇した父親ウィリアム・プレストンは、“*God forgive me my hardness of heart towards the fatherless child!*”⁽¹⁾と告白して死ぬ。彼は事件の後、自らの過ちと愚かさを認め、ヘレンとグレゴリーと一緒に寝ている墓の足元に、自分も葬ってほしいという願いを、最後に残す。そこに流れるのは、後悔の念と静かな哀調である。頑迷であった父親ウィリアムと家の後継者として甘やかされていた「私」に非があるのは明らかにされているが、正義と悪いう道徳の両極化を作者は読者に禁止している。すべての登場人物は狼狽し無力な個人にすぎないというスタンスがとられている。

作品中で最も美しい魂を持ったグレゴリーの死の原因は、「私」にあるので、本来「私」に語りという主体性は与えられないはずである。ところが、「私」の罪はどこかで読者から免除され、「私」がこの物語を語るのである。なぜ、ギャ

スケルはヒーロー的な役割を与えたグレゴリーに、強者が弱者を支配するという論理を鋭く批判させていないのだろうか。虚偽に満ちたヴィクトリア朝社会の本質はグレゴリーによって暴露されていないのであろうか。威厳をもっていた家父長制度が命ずる、苛酷な法で抑えつけられた子供や女性たちの多弁な抗議の「声」はそこにはない。善良な母親ヘレンも、物語の頂点に立つグレゴリーも、常に寡黙な人たちである。彼らはその危機感を悲憤慷慨の言辞と行動に発散してはいない。本稿ではヴィクトリア朝期のイギリスという歴史的文脈の中での、抑圧されたものの沈黙の意味を検討してみたい。そうすることによって、この作品にもうひとつの読みが生まれる。

2. ヘレンの「涙」

語り手の「私」は、自分を早産した後、すぐに亡くなってしまった母親ヘレンの身の上から、話を始めている。若いころから、多くの個人的な苦しみを味わったヘレンのあまりに短い生涯は、この作品を感傷的にしている。同時に、女性は、妻や母として、夫や子供をとおして、家庭の領域でのみ自分の生を生きることを余儀なくされた状況が書きこまれている。ヘレンの悲痛は、あるひとつの事実を告げている。女性は、男性から圧迫を受けやすく、性の対象としての犠牲、望まない妊娠、相手による放棄、男性の経済的依存関係を受けやすいという状況に囲まれている。

語り手の「私」は、自分の母親ヘレンの身の上から物語を始めている。美しいヘレンは「私」を早産してすぐに亡くしてしまう。彼女が悲惨な状況に陥ることになったのは、二回目の妊娠中に、肺結核であった夫に先立たれたからである。すでに二十歳で幼い子供を抱えて、未亡人となった彼女は、経済的な困窮という致命的な問題に直面する。その上、幼い女の子をしょう紅熱で死なせてしまうという心の傷を負ったまま、二週間後にグレゴリーを出産する。可愛らしい盛りのわが子に先立たれた母親に残された想いは、甘美な思い出か、苦々しい悔恨という感情に相違いない。しかし、ここでヘレンの内面を知る説明は、一切付け加えられていない。ヘレンの苦悩や不安、恐怖や悲しみといった感情を表現する言葉は見当たらないのである。語り手の情緒的な語りもない。沈黙のみである。絶望

のどん底にいるヘレンの悲しみは、ファニー叔母が目にした光景によって間接的に伝えられる。

... My aunt has told me that she did not cry; Aunt Funny would have been thankful if she had; but she sat holding the poor wee lassie's hand, and looking in her pretty, dead face, without so much as shedding a tear. (2)

ヘレンが涙ひとつ見せないよりも、さめざめと泣くほうが、どれほど自然であったかとファニー叔母は言っているのである。彼女の沈黙はその後も続く。彼女がやっと大泣きをするのは、グレゴリーを出産してからなのである。その涙はある種の心の浄化作用にほかならない。

So she continued until after Gregory was born; and, somehow, his coming seemed to loosen the tears, and she cried day and night, till my aunt and the other in dismay, and would fain have stopped her if they had but known how. (3)

どうすれば、泣くのがとまるのだろうか、という観察者の心の思いと困惑が示されている。新しい命をこの世に送るといふ命がけの使命を果たすまでは、生涯の伴侶の喪失と、それに続くわが子の死を実感できなかった、いや、してはならない女性の立場が示されている。それは人間の中途半端な悲しみではない。

当然、寡婦となったヘレンの生活苦が問題となってくる。ヘレンとファニー叔母が細々と針仕事で稼いだ収入では生命を保持するのがほとんど不可能であることが、明らかにされている。それをより明確にしているのが、ヘレンの視力の衰えである。ヘレンの視力が落ちたと言ったのは、若い時代にひどく泣き暮らしたからだ、「私」は語っている。しかし、この見方は作者ギャスケルの見方とは一致していないことは明らかである。当時の社会は、「結婚をしている女性たちは、夫の所有物としての範囲内で、人間の意思表示ができた。夫のいない者たちは、固有の権利を行使するのは禁止されていた。」(4) ののである。たとえ、ヘレン

が生気を失ってしまうような年月の間に、目が見えなくなるまで一日中、縫い仕事をしたとしても、質素な生活を維持するのに必要な賃金は支払われない。裕福な階層から見れば、全く取るに足らない存在であった労働者階級の女性が、人間の生きる権利を声高に主張する力量は持っていない。異なった経済集団、あるいは階級が相互の経済的利益のために対立している現実を承知している作者は、下層階級の血と汗と涙には敏感なのである。「1840年代後半から死ぬまで、キリスト教的社会主義運動への参加意欲が衰えなかったギaskellは、十九世紀資本主義への明確で、行動的な挑戦をし続けた。」⁽⁵⁾ という事実を想起してみよう。行き過ぎた競争が行われている資本主義社会において、ヘレンのような資力のない女性は、誰かに全面的に依存しなければ生きられない。男性の保護を必要とする弱い個人を慰め、励ますには、世間の見方はあまりにも狭く、あまりにも偏りがある。そこでは、読者が寄せる表面的な同情は通用しない。人間の偽善を削り落とすかのように、ギaskellは物語の展開上で、純真なヘレンをある意味で打算的な女性と変容させている。つまり、ヘレンはグレゴリーを養育し一人前にする資金援助をあてにして、物質的要求を満たしてくれるウィリアム・プレストンと人生を歩んでいく覚悟をしたのだ。ヘレンは金と力のあるプレストンとの結婚によって、自分とグレゴリーが救済されることを望んだのだ。プレストンが無一文ならば、決して彼との結婚を承諾しなかったであろう。ここで、純粋なヒロインのロマンチックな恋愛から移行して、二人の真の愛情に基づく結婚と到達するという伝統的な小説のパターンは見事に解体される。「私」の説明、“She loved Gregory, and she did not love him.”⁽⁶⁾ は、明快である。そこには、情緒的な装飾の表現は排除されている。

では、ヘレンが子供の時から喪失してしまったもの、自己、すなわち、「コトバ」は夫の庇護を再び得た状況においてよみがえっただろうか。ヘレンは夫に対して豊かな愛情が湧き上がってこない。夫が受け取るのは、「物静かな氷のようなコトバ」である。一方において、ヘレンは夫ウィリアムが羨望し嫉妬するほどに、グレゴリーを慈しみ可愛がる。彼女は、「コトバ」をまだ理解できないグレゴリーに、生き生きと語りかける。夫にとって、グレゴリーは所詮、他人である。夫と妻と子供の三人の不自然な関係は、次のように、述べられている。

...; but it just turned him sour to see how her eye brightened and her colour came at the sight of that little child, while for him who had given her so much she had only gentle words as cold as ice. (7)

元来、愛の成就是、愛し愛される関係の完成である。そうして、自他の境界の溶解へと展開する愛の充足感は、お互いの意識の共有を前提にして発生するが、ヘレンとウィリアムの意識は当初からずれている。ヘレンの経済的困窮からの解放願望と、四十過ぎても独身であったウィリアムの結婚願望で一致した二人の結婚は、相互コミュニケーションを欠いたままに始まっている。しかも、ウィリアムは無口なタイプであると説明されている。そして、ウィリアムの前ではヘレンのコトバは表現に達する前に崩れ落ち、沈黙に立ち戻っている。彼女の沈黙は、一体、何に起因しているのだろうか。支配者である夫に対して、妻は機嫌をとって夫に仕えなければならない存在であると言う当時の社会習慣は根強いものがある。この深い意味を、ここで考えなければならない。女性にとっての体制や權威は、国家や「家」以上に直接的には父権である。ヘレンが従順な妻であったことは、“I believe she did all that she could to please my father, and a more dutiful wife, ...” (8) とする「私」の観察で明らかである。自己表現が制限され、意思決定力を与えられていない女性の問題は、当時の文化的事情と大いに関係がある。ヴィクトリア女王の存在を抜きにして、当時の理想的な女性像は語れない。女王は時代の風潮によって作り上げられていた。また、反対に作り上げるのに寄与したのである。つまり、「女王は国家の長であり、その義務を振舞いの細かいところまで、やかましく遂行したけれども、それでもなお、彼女は、女性は絶対的でない人間 (a relative creature) である、という誰もが支持した常識に従ったのであるし、夫アルバートとの私的な関係においては、彼女はあらゆる点において忠実な妻 (a dutiful wife) であった。」(9) 家長として先祖から受け継いだ「家」そのものを維持していく責任を負って、絶対的決定権を持つ夫。激しい競争の市場から隔離された家庭という聖なる場に奉られた妻。この両者の関係において、自分の体験を言語化できないヘレンの姿が浮かび上がってくる。

連れ子グレゴリーをめぐる夫と妻の感情の食い違いから、二人の結婚生活は墓場のように冷え切っていく。黙っているヘレンに対して、ウィリアムが夫として

の強引な力を行使した結果は悲劇である。ヘレンは妊娠期を乗りこえられない。夫は妊婦と胎児を保護する姿勢を示さなかったのである。ヘレンは、怒りと絶望と苦渋に満ちた言葉を吐くことなく、「私」を早産して、永遠の沈黙の世界に入ってしまう。彼女を沈黙させたものは、一体、何であるのかが物語の後半でさらに鮮明になってくる。

3. 疎外されたグレゴリー

なぜ義父ウィリアムは、物心のつかないうちからグレゴリーに対して横暴であったのだろうか。ここで考えなければならないのは、ウィリアムは「家」の後継者を養成する使命をもっていたことである。すなわち、彼は、父から息子へと三百年以上も相続してきた土地の所有者である。彼にとって唯一の実の子、「私」こそ、跡取り息子なのだ。父権制社会とは、上流、中産階級層が直系相続によって家の富と名誉を守ろうとする社会に他ならない。家長の地位を約束されているから、「私」は、父親が所有する農場で働く使用人たちや周囲の人々から、ちやほやされて甘やかされたのである。それは、ウィリアムからの虐待と傲慢な「私」からの疎外に、黙って耐えなければならない立場にあるグレゴリーとは対照的である。大切に育てられている「私」は、グレゴリーに無理難題を言い、侮辱的な言葉を浴びせる。父親の財力を継承できないグレゴリーに味方する者は、誰もいない。彼を養育したフェニー叔母の存在があるが、彼女のグレゴリーへの愛情は希薄と言える。なぜならば、幼児期に「私」の身体が虚弱であったため、彼女は「私」の状態にばかり気にかけるという習性がついている。グレゴリーは孤立しているのである。母親の愛情が、彼の孤独を癒すに違いない。しかし、もはや彼の母はいない。ここで、「母というものは、とても単純に、愛なのである。ギャスケルにおいて母を奪われることは、愛を奪われることである。」⁽¹⁰⁾と述べたBonaparteの意見を重視したい。“The Half-brothers”は、グレゴリーが無条件の愛を示す母性へ回帰することで終結している。無口なグレゴリーは最後の息を引き取るときに、追憶の中に生きる母親ヘレンの姿を追っている。彼が語るのは、母が幼い兄弟二人の小さな手を重ね合わせ握らせた記憶である。グレゴリーも「私」も母からの強制的な離別という幼児体験をしているが、「私」は資本を保持

する父親から承認されている。一方、グレゴリーはどうであろうか。

テキストにおいて、彼に付与されている形容詞を列挙してみよう。そこでは、“lumpish”, “loutish”, “awkward”, “dull”, “ungainly”, “stupid”といった類似した意味を持つ形容詞が、実に二三度、使用されている。グレゴリーは近代社会にうまく適応ができない不器用な子供でしかない。いかに彼が競争社会で敗北しているかを強調しようとした作者の苦心の跡が窺われる。彼は厳格な父親ばかりでなく、学校の教師からも見放されている。

When we were sent to school, it was all the same. He could never be made to remember his lessons; the schoolmaster grew weary of scolding and flogging, and at last advised my father just to take him away, and set him to some farm-work that might not be above his comprehension. ⁽¹¹⁾

物事を本質的に理解させようとしなない教師には、グレゴリーという個性を大事にする配慮も血のぬくもりも欠けている。それは、ギャスケル自身が受けた教育とは本質的に異なる。彼女はユニテアリアン派に属している。ユニテアリアンの学校では、生徒を決して鞭で叩いたりはしない。教室でゲームをしたり、劇化した場面を見せて楽しみながら学ばせるという当時で最も進んだ教育方法を取り入れている。支配と服従の関係が強固なヴィクトリア朝の下で、英国国教会派の先生の理想は、いわゆる「紳士」の養成である。個々の教育はそれぞれに合ったやり方で自己実現を達成させて、社会で活躍できるメンバーを育成するという方法は退けられていた。⁽¹²⁾ グレゴリーは退学させられる。激しい競争主義を知り抜いている教師に、物を言えない惨めな子供への理解と同情を求めるのは、ほとんど不可能に近い。これを契機にして、彼はなお一層、陰気で無口な少年となっている。学校制度から追放された青少年の心が傷つくことは、決して単純ではない。地位や門閥を無意味な社会の約束事として破棄して、個人の能力によって勝ち負けを決しようとする近代個人主義者からも彼は排除されたことにつながるからだ。従って、グレゴリーの心理の陰影は直接には描かれていないが、「無口になった」という表現によって、彼の悲哀と憂鬱が深刻であることが暗示されている。

では、「うすのろのグレゴリー」はどのようにして、学校、家、彼が置かれた

八方塞がりの中で自己を発展させていくのだろうか。物語の後半では、愚鈍と言う形容詞がつけられていたグレゴリーの正体が明らかにされる。受身の傍観者であるとされていた彼が、実際は積極的な観察者であり、救援者となりうる能力と揺るぎない勇気を持っていたという皮肉的な展開でストーリーは進む。言語主体者である父のウィリアムと、彼の継承者となる「私」を圧倒してしまうほどの力量をグレゴリーは示して、彼の短い生涯を終える。このプロットを読み直す時、テキストに流れる言説、無反応な沈黙の中に潜む、ある一つの真実が見出せる。以下、次の章でさらに考察してみよう。

4. グレゴリーの死

グレゴリーは老人アダムに認められることによって自己確認を行うとともに、彼とのコミュニケーションを通して主体性が回復している。アダムがグレゴリーに施したのは、職業訓練である。羊飼いである彼は、抽象観念や空疎な議論ではなく、日々の生活に密接に係わる技能を教え込んでいる。羊飼いの見習いの仕事に就いたグレゴリーが、充分な腕前を持ち自立できるようにアダムは指導している。しかも、忍耐と寛容で羊を世話するように、グレゴリーを育てている。その結果、丘陵地帯の地勢を知っていることにかけては、グレゴリーの右に出る者はいない。つまり、ある特定の領域においては、個は集団の中に埋没していない。孤児となったグレゴリーの人権は侵され、弱者として周縁に押しやられていても、彼は輝かしい個として浮き上がっている。というよりも、むしろ優位な立場から主導権を取り、言語を絶対視する父親の権威を揺るがしている。グレゴリーの強烈さは言うまでもない。彼は、異父の弟のために、進んでわが身を捨てる用意をし、それを黙って実行したというパワーである。

ここで強調しなければならないのは、彼の行為は単に優しく親切であっただけではなく、慎重で合理的な判断力に基づき計算されていたという点である。弟の命が救われたのは、彼が情に溺れずに理知的に物事を運んだからである。不意の大吹雪が吹き荒れ、曇の嵐が丘をおおう荒野で、行方不明となった弟を捜索するという危険な行動は、情熱だけに支えられてはいない。適切な配慮と管理によって羊の世話をする仕事に精通している彼は、愛犬のラッシーを連れて出かけてい

る。ラッシーはプレストン家で、決して可愛がられない、ものを言わない動物である。作者は、この犬がプレストンから痛い目に遭わされている場面をストーリーの中に組み込んでいる。かろうじて主人の情けで生きている犬が、グレゴリーのパートナーとして大きな役割を果たすところに作者の皮肉がある。さらに、グレゴリーはアダムから受けた教えを忠実に実行している。洪水で暴れ回る川の危険、雪崩、石崩れ、恐ろしいあられや雪のあらしをアダムは頭ではなく、深い経験として理解している。こういう逆境の下でアダムは羊を用心深く導いているからだ。暗闇がしだいに濃くなっていく状況にもかかわらず、グレゴリーは沈着冷静さを失っていない。丘陵地帯で遭難している弟を発見するとすぐに、心配する父親が待つ家に向かってラッシーを知らせに走らす。その間、彼は弟を岩の下で休ませて、注意を怠ることなく励ましと支持を与える。凍死を防ぐため、自分の体温を弟に与える。死の恐怖が強まってくるが、彼は自分が着ていた肩掛けと外套ですっぽりと弟を包み込む。さらに、ギヤスケルはグレゴリーの知恵を示すために、弟の「私」の両足には羊飼いが着こむ分厚い上着が、念入りに巻き付けられていたという説明を語り手にさせている。搜索と救助、そして、その後の手当てに至るまで熟達した技能を彼は見事に発揮している。そして、この献身は絶対的な自己放棄によって完成する。凍える寒さのなかで、「私」に外套を譲ったグレゴリーは死んでしまう。

これから大雪が降るだろうというアダムの予想や、近道をしないで、いつもの道を通って帰ってくるようにという父の言いつけに従わないで、使い帰りの道を勝手に決めてしまった「私」の傲慢さに非があるのは明らかである。しかし、ギヤスケルは「私」には生を、グレゴリーには死を与えている。ここで指摘しておかなければならないのは、この事件の後、グレゴリーの存在を軽視していた周囲の人々は、皆一様に何も語らない、いや、語れないのである。それは、次のように述べられている。“We spoke no more of Gregory. We could not speak of him; but he was strangely in our thoughts.”⁽¹³⁾ この沈黙、テキストの空白をどう解釈するかは読者の判断に委ねられている。

一つの解釈として、プレストン一家の罪は、聖者グレゴリーの死によって贖われ救われたという構図が浮かび上がる。へりくだった静かな牧者グレゴリーにキリスト・イエスのイメージが見えてくる。人間はその祖先、アダムとイヴの墮落

によって原罪を負わなければならないが、神の子イエスの贖罪によって救済されたとするキリスト教思想が、ここで重ね合わさってくる。聖なる者の前では誰もが沈黙してしまうように、悲しいまでに愛情深かったグレゴリーについての言葉は空しい。どんな理論も概念も制度も、彼の前では色褪せてくるのである。ここで沈黙していた者が、主体者になるという逆転劇が起こっている。差別的な社会の構造において下位に置かれている者の価値観を、ギャスケルは引き上げようとする。例えば、ヘレン、グレゴリー、アダム、そして犬のラッシー、彼らは受身で、無反応で、まったくアイデンティティを持っていないかのように見える。ある意味で、彼らは語る主体としての自己を奪われている。しかし、重要なのは、彼らはヴィクトリア朝期特有の家父長制度の重圧に押しつぶされた、単なる犠牲者としての範疇に入れられていないことである。むしろ、抑圧する相手を暴力ではなく、人間離れをした、あまりにも強い愛情で、圧倒してしまった強者として描かれている。

その証拠に、ウィリアムのいらだちや心のゆがみは、日常生活の中から引いていき、「私」の一方的な自己満足も最終的に消えてしまっている。グレゴリーとかかわりを持った人々は皆、人間的な同情や思いやりといった情緒の潤いと哀感を持った人間へと生まれ変わっている。他者と絶え間なく衝突し、嫉妬深い人間に対して、グレゴリーは言葉ではなく、身をもって行動で愛の激しさと難しさを提示したのである。ここに、この作品のテーマが見えてくる。

5. ま と め

なぜ、グレゴリーは沈黙したのか。この問題にそろそろ決着をつけなければならない。今まで述べてきたように、彼は内に秘めた力を持っている。その力は、言うまでもなく、大きな資産や政治権力ではない。彼は自己成長する可能性を少しも認めようとはしない家父長制度そのものに楯つこうなどは考えない。その権威に真っ向から対決して白と黒をつけようとする世間の誤謬から遠ざかるかのように、ギャスケルは創造上のヒーローとヒロインにこの世の勝利を与えていないし、彼らを虐待した者を徹底的に裁いてもいない。なぜならば、束縛を拒否した者も、もし最後に勝利者となるならば、その時には今度は彼自身が、今まで自

分が戦ってきた当の相手と同じものとなり、束縛の手綱を握るものとなるからである。それゆえに、ヒーローは自己主張を必要としないのである。作者が最後に彼に与えた自己表現は、“smile”である。彼の動かない、血の気が引いて冷たくなった顔には静かな微笑が浮かんでいる。この微笑というわずかな身体表現に、グレゴリーの達成感、すなわち、母が死の床で弟を守って欲しいと頼んだ願いを叶えた喜びがこめられている。それは、無力な者の冷笑ではない。なぜならば、彼は何の報いられるところもない犠牲の歯車仕掛けの中にまぎれ込んで、弱気に陥り自分を否定してしまったのではなく、はっきりと意識しながらその歯車仕掛けの運行をやったのだからである。

確かに、“The Half-brothers”は「自己犠牲の物語」⁽¹⁴⁾という解釈が成り立つであろう。この読みは非常に親しみやすく、また分かりやすい読みである。しかし、弟を助けたという万人の胸を打つ一面によってのみ、彼の行動は捉えられるべきでない。彼の自己犠牲は感傷的な自己犠牲でもなければ、欺瞞的な自己麻痺でもない。ものを言わないグレゴリーに作者はある真実を啓示させ、利己的な大人の心眼を開かせる役割を与えている。破壊された家庭、傷ついた心、捨てられた命、曲げられた人格を否定することによって、グレゴリーは父を乗り越えた。そして、彼から命を救われた弟の「私」は、愛する家族と私自身の物語を主体的に語る。ストーンマンは、断固たる男性中心の当時の社会で、ギャスケルほど女性が世の中に向かって話す、そして、語る重要性を信じていた作家はいない、と分析している。⁽¹⁵⁾ そのギャスケルが、沈黙のヘレンとグレゴリーを通して読者に提示するのは、彼らの情緒的な嘆きや悲しみというよりも、むしろ、彼らを沈黙させようとする家父長制文化そのものなのである。それは、本来、人間存在の母胎であったはずの自然の大いなる生命を破壊する暴虐さである。読者の魂に愛と喜びを潤沢に供する小説として、“The Half-brothers”を読むよりも、社会的弱者を沈黙させ隷属化させる父権制社会に対する挑戦的な小説として読みたい。そうすることにより、この作品はより真実でより広い視野を読者に与え、混迷する現代で蘇ってくる。

注

(1) A. W. Ward (Intro.) *The Works of Mrs. Gaskell* 8 vols. (New York: AMS

- Press, 1972) p.404. 以下、同書からの引用は、*The Half-brothers* と記す。
- (2) *Ibid.*, pp.391-392.
 - (3) *Ibid.*, pp.392.
 - (4) Tim Dolin, *Mistress of the House: Women of Property in the Victorian Novel* (Aldershot and Brookfield USA, 1997) p.8-9.
 - (5) Anna Unsworth, *Elizabeth Gaskell: An Independent Woman* (London: Minerva Press, 1996) p.213.
 - (6) *The Half-brothers*, p.394.
 - (7) *Ibid.*, p.394.
 - (8) *Ibid.*, p.394.
 - (9) Duncan Crow, *The Victorian Woman* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1971) p.51.
 - (10) Felicia Bonaparte, *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon* (Charlottesville and London: University Press of Virginia, 1992), p.19.
 - (11) *The Half-brothers*, p.397.
 - (12) Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (London: Paul Elek, 1975) p.12-13. Unitarianism の教義について、詳細な説明がなされている。
 - (13) *The Half-brothers*, p.403.
 - (14) John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works* (Sussex: Linden Press, 1970), p.313. において、この作品のテーマは“self-sacrifice”であると指摘されている。さらに、Enid L. Duthie も、*The themes of Elizabeth Gaskell* (London: The Macmillan Press, 1980), p.195. において、Sharps と同じ見方で言及している。
 - (15) Patsy Stoneman, *Elizabeth Gaskell* (Sussex: The Harvester Press, 1987), p.61-64. Stoneman は、この書において、多くの批評家は論じていないが、ギャスケルは女性に自分の信念に従って行動し語ることを要求していたと指摘する。